

くまにち

論壇



国連事務次長、  
軍縮担当上級代表  
中満 泉

なかつみ いずみ 89年国連入り、  
難民、人道支援や安全保障に従事。著書  
「危機の現場に立つ」。ニューヨーク市  
住。59歳。

8月1日から1週にわたり開かれる核兵器不拡散条約運用検討会議に備え、早い夏休みをいただいた。夫の国であるスウェーデンの森の中の一軒家で家族と共に週間半を過ごし、数日前に仕事に戻ってきた。毎日庭仕事をし、森でベリヤを摘み、料理をこつてアールを囲む。自然の恵みに感謝し、大自然の中での自らの小ささを感嘆する。スウェーデン式にも週間は休む夫や娘たちよりずっと短い夏休みなのだが、私にとっては命の洗濯と、多忙な日常ではかなわぬ息災に耽る大切な時間だ。

しかし、今年は言葉にならない衝撃の時を過ごすこととなった。日本の憲政史上最長の在任期間を持つ安倍晋三元首相が、安全なはずの日本中で、あるところか参院選の応援演説中に銃撃されたこと。その強力なリトアニアで海外でもよく知られ、私自身もお会いしたことがあった安倍氏の暗殺は、スウェーデンでもトップニュースで報じられた。

それだけでも十分衝撃的なのに、長く海外で暮らす私には信じ難いニュースも伝わってくる。40年ほど前、私が日本で大学生だった頃は「決して近づいてはならない」と言われていたカルト集団が、与野党問わず政界に食い込んでいるという。

# 私たちは社会を変えられる

事件の背景は真相究明を待つべきだが、どんな理由があろうと、自らの主張を通すためのこのような暴力は許されない。それが政治的なものであれ、絶望感に突き動かされた個人的な怒りであったとしても。

去年8月の本欄で「祖国日本には国内の様々な矛盾や課題に真剣に向き合い解決してほしい」と書いた。この夏の衝撃的な出来事は、日本に暮らす全ての人の平和で豊かな未来のために、社会に立ちほだかる様々な問題を直視考え、解決のために早急に行動しなければならぬことを改めて示しているのではないか。

安全保障環境や世界経済状況の激変、科学技術の進歩による社会の大変革、加害する気候危機など世界が大きな転換点にある今、私たちが日本国内の矛盾に向き合い、解決していくことは、日本という国の生き残りの問題でもある。人口減少のなかで、取り残される人々や地域なしに社会を維持していくためには、システム全体の大変革が必要だ。そしてそれは必ず、民主的プロセスを経て決定されなければならない。

私は1998年から2004年まで、民主化支援のための国際機関に勤めていた。民主主義体制における政治は、単に選挙を定期的に行えば

良いという形式的なものではない。また多数の力、多数決で政策を進めていくという単純なものでもない。SNSで盛り上げられる、時に攻撃的な「賛成」「反対」の広範囲を分断を生むだけで、変革のための建設的なエネルギーは生み出さない。

政治には、異なる立場と意見の間を対話と議論によって埋め、共通項を探り出し、完全ではないけれどもなるべく多くの人の利益に資するよう努力する、誠実で切れ目のない営みが必要なのだ。国連のマルチ外交の努力にも似ていると思う。

元首相襲撃直後の投票日であったにもかかわらず、今回の参院選の投票率はわずか52%であった。これが政治不信や人々の無力感に起因するのなら、そのことを最も憂慮する。今こそ政界だけでなく各界のリトアニアたちが声を上げてほしい。未来に希望を持つように、私たちは社会を変えられるのだ。そしてリトアニアとは組織のトップや幹部だけでなく、社会のあらゆる場所に存在する私たち自身が、勇気をもって正しいことをしよう。

1958年の大晦日の夜の、ハイム・ショルド第2代国連事務総長の言葉で締めくくろう。「平和への仕事は、私たち一人ひとりの個人的世界から始まる。恐怖のない世界を創るためには、私たちが恐れてはならない。正義のある世界を創るには、私たちが正義を持たねばならない。そして自由のために戦うためには、私たちの心が自由でなければならぬ。私たちが自ら犠牲になる用意がないのに、他にそれを求めることができようか。厳しい政治の現実からかけ離れた、高尚な原則を述べているだけだと思っただろうか。私は、そうは思わない」